

『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

御船征西 — その2 —

今回は「御船征西」と題し、百濟滅亡といった歴史的背景やその援軍に



水城跡 (福岡県太宰府市・大野市・春日市)

向かった斉明天皇の「征西」にまつわる歌や伝承を取り上げた。今回は、

それに続く歴史的事項と征西の途次に中大兄皇子が詠んだとされる大和三山妻争い伝説の歌を扱う。齊明天皇を朝倉橘広庭宮(福岡県朝倉郡朝倉町)で失った日本軍は、中大兄皇子が三度目の皇位も辞し、称制して百濟への救済軍派遣という難局を切り抜けようとした。百濟の王子豊璋を乗せた第一軍は天智天皇稱制元年(六六二)正月、娜の天津を出港する。翌年(六六三)八月十七日、白村江(錦江)で新羅・唐の連合軍と激突、戦うことわずか十日で日本軍は大敗を喫した。「日本書紀」はそのようすを「日本軍は船隊を整えないまま、大唐軍に攻めかかった。陣を固めていた唐軍は左右から船を出してこれをさみ包囲して攻撃した。日本軍はたちまち敗れ、多くの者が水に落ちて溺死し、船のへさきをめぐらすこともできなかつた」と記している。

己酉に、日本の諸將と百濟王と、氣象を視ずして、相謂りて曰く、「我等先を争はば、彼自づからに退くべし」といふ。更に日本の伍乱れたる中軍の卒を率て、進みて大唐の堅陣之軍を打つ。大唐便ち左右より船を夾みて繞み戦ふ。須臾之際に、官軍敗績れぬ。水に赴きて溺死者衆し。艦船廻旋すこと得ず。朴市田来津、仰天ぎて誓ひ、切齒りて噴りて、數十人を殺し、焉に戦死せぬ。是の時に百濟王豊璋、数人と船に乗り、高麗に逃げ去る。

と結んである。
中大兄 近江宮に
天の下治めたまひし
天皇」の三山の歌
一首

香具山は
敵傍雄雄しと

耳梨と
相争ひき

神代より
かくにあるらし

然にあれこそ
うつけみも

妻を
争ふらしき

(巻一・二三番歌)

反歌

香具山と

耳梨山と

あひし時

立ちて見に来し

印南国原

(巻一・二四番歌)

わたつみの

豊旗雲に

入日見し

ところで、この齊明天皇の征西時に詠まれた中大兄皇子の歌がある。香具山と耳梨山が敵傍山をめぐって妻争いをしたという。このことを「三番歌」には「神代から、こうであるらしい。昔もそうだったからこそ現実にも愛する者を争うらしい」

今夜の月夜

さやけかりこそ (巻一・一五番歌)

右の一首の歌は、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本にこの歌を以て反歌に載せたり。故に、今も猶しこの次に載す。また、紀に曰く、「天豊財重日足姫天皇の先四年乙巳に、天皇を立てて皇太子としたまふ」といふ。

この作品は、『播磨国風土記』に伝えられる次の伝説と呼応しており、西へ向かう船中、ちよとど播磨沖を通りかかった際に中大兄皇子が当該の伝説を思い起こして詠んだとされる。

上岡の里。「本は林田の里なり。」土は中の下。出雲の国の阿菩の大神。大倭の国の畝火・香山・耳梨の三の山相聞ふと聞きたまふ。此

に諫め止めむと欲して上り来ましし時に、此処に到るすなほち聞ひ止むと聞かして、その乗らす船を覆して坐しき。故れ神阜と号く。阜の形、覆へしたるに似たり。

(『播磨国風土記』 揖保の郡上岡の里条)

伝説の下の地となつているのは先にも触れた大和三山(香具山・敵傍山・耳梨山)の妻争い伝説で、この争いをやめさせようと出雲の国からやつてきた「阿菩の大神」が、播磨の国まで来た時に争いが止んだことを聞き及んで、ここに鎮座したという話である。一四番歌の「香具山と耳梨山とが争つた時に、阿菩の大神が立ち上がって見に来た印南国原よ」という内容と呼応しているのである。そして、「一五番歌は左注に「反歌らしくないけれども、「旧本」にこの歌を反歌として載せてあるので」と断つてあるが、「海

上豊かにたなびく雲に落日が輝き、今夜の月は清らかであつてほしい」という、歌を詠つた時の景観を詠つたものである。これら三首の歌の中で当時話題となつたであろうと考えられるのは、一三番歌の「うつけみも妻を 争ふらしき」の表現である。中大兄皇子は弟・大海人皇子と額田王をめぐって妻争いをしたとの風聞があつた。真偽の程はわからないが、中大兄皇子の意味深長な歌は周囲の耳目を集めたに違いない。

ちなみに、一三番歌二句目の原文は「雲根火雄男志等」であるが、歌詞の解釈によつて三山の性別が異なる。おおむね

- (A) 香具山(女)が敵傍(男)を「雄々し」と思つてそれまで親しかつた耳梨(男)ともめるに至つた。

- (B) 香具山(男)が敵傍(女)を「愛し」と思

つて耳梨(男)と妻争いをした。

(C) 香具山(女)が敵傍(男)を「雄々し」と思つて耳梨(女)と男を取り合はつた。

の三説がある。『万葉集』には、一人の女性を二人の男性が争う歌もある。そうした事例や山容などを考え合わせると、それぞれ長一短があり、解釈がわかれるところである。白村江で大敗した中大

兄皇子は、天智天皇六年(六六七)に都を飛鳥から近江(滋賀県)に移した。これは、外的には唐・新羅の襲撃に備えての事であり、対馬や筑紫に水城(防塁)を築き、防人を配置し、いち早く情報を得るために各地に烽(のろし台)を設置していることと呼応している。また、内的にはこれまで多くの人の命が奪われてきたことに對する「刷新」の気持ちがあつたことは否定できない。

厚木市 荒井 一雄

習先達

「新しき時代の詩」には非ずして「詩の新しき時代」と築かん

空海天神嵯峨皇

空海様・天神様(菅原道真公)・嵯峨天皇様…

絶句律詩天下光

絶句・律詩、天下に光る…

和魂漢才大調和

「和魂漢才」が見事に調和し、

立志精進追聖王

私も志を立て精進し、聖王様達を追はん…